

デート・ア・ライブ 風見サンフラワー

文々。社広報部部长 シン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

五河士道、彼は何人もの精霊を封印してきた。それによって起きてしまった士道の暴走が収まったのも束の間、ソレは現れる。

風見幽香。

彼女は人でもなく、精霊でもない存在。彼女の力は凄まじく、精霊では歯が立たない。そして彼女はある世界からある者によって飛ばされてきたと言う。

そんな彼女を元の世界へ戻す為に士道は奮闘する。

デート・ア・ライブと東方projectのクロスオーバーです。

苦手な方はブラウザバック推奨です。

デートアライブ12巻の続きからです。

目次

出会い	1
彼女の名は風見幽香	6
五河琴里の憂鬱	9
殿町くんは唯一の友達	11
花の好きな妖怪とコート	15
邂逅前	21
兄妹（痴話）喧嘩	26
精霊・二重	30
報告と夕食	34
妖と凶	37
不穏な動き	42
再びひまわり園へ	46
茶話①	48
茶話②	50
鍵	53

出会い

『精霊』

人間の少女の様な外見をしているそれは、空間震という災害を発生させながらこの世界に現れる特殊災害指定生命体。そして、その戦闘能力は強大であり、対処法である武力での殲滅は非常に困難。それでは手の打ちようが無いではないか？——否。対処法はもう一つある。

デートしてデレさせる。

精霊に対抗できる力を持ったたった1人の青年、五河士道。彼は精霊とデートしてデレさせ、キスをすることで彼自身に精霊の霊力を封印する力を持っている。彼は多くの精霊の力を封印し、精霊を救ってきた。

しかし、今回は彼と精霊とのお話ではなく、彼とある大妖怪のお話。

~~~~~

「はあああ…寒い」

いつも買い物に来ている商店街を歩いている士道は口元に両手を寄せ自分の吐息を当てる。クリスマスから1日過ぎ、商店街に蔓延っていたサンタやトナカイなどの洋風な装飾は消えて門松やしめ飾りなどの和風な装飾に変貌を遂げている。まるでクリスマスでかかった魔法が解けたかのようにガラリと雰囲気が変わった。

「これなら検査の時に手袋を持ってくればよかったかな」と言っって手を擦り合わせた。

士道は検査と言ったが、彼は彼が力を封印した精霊の検査に行つたのではなく、士道自身の検査であった。何故彼が検査を受けたのかと言うと、士道は半月前に暴走してしまったのである。暴走してしまった原因は精霊の力の封印にあった。士道はこれまで十香、四糸乃、琴里、夕弦、耶俱矢、美久、七罪、折紙の8人の精霊の力をその

身に封印してきた。通常、土道と精霊たちは見えない経路パスで繋がっており、封印した霊力を精霊たちと少しずつ循環させている。しかし、その経路パスが急激に狭まり、本来ならば循環するはずの霊力が塞ぎ止められて土道に留まり続け、オーバーヒートのような状態になってしまった。さらに、放出出来なくなってしまった霊力が土道の体を通して発現してしまったのだ。そして土道は（いろんな意味で）暴走してしまったのである。土道の暴走は精霊たちの手によって収められたのだが、暴走中の土道は高校の担任や同級生にも手をかけていたらしくアフターケアが大変らしい。

「それにしても、半月は長かったなあ」

とボヤきながら商店街を歩く土道であった。



「待ちなさい真那あー!」

怒気のこもった中学生くらいの少女の声がへラタトスクの保有する地下施設の廊下に響く。

「待てと言われて待つ馬鹿なんてどこにもいねーですよ!」

続けて先ほどと同じくらいの年齢の少女の声が廊下に響く。赤い髪の少女が青い髪の少女を走って追っている。追いかけている少女は五河琴里、土道の義理の妹で赤い髪が黒いリボンで二つに括られている。追いかけている少女は崇宮真那、自称土道の実の妹で青い髪が一つに結われている。何故こんな追走劇が行われているのかというと…

「真那!あなた土道にも検査はちゃんと受けろって言われてたじゃない!」

「うっ…でっ、でも私はへナイトメアを追わなけきやいけねーんですよ!」

真那は戦闘時に負った怪我や自分の体のことをそっちのけにして最悪の精霊へナイトメアを追っていた。真那は土道の暴走を聞きつけて土道のもとに戻ってきたのだが、土道の暴走が収まると同時に

琴里に捕まり、無理矢理検査を受けさせられていた。しかし、真那は琴里の拘束を振り切って逃げ、それを逃すものかと琴里が追いかけてこの追走劇は始まったのである。

「…っあなたねえ…このままやっていたら体が持たないわよ！」

「分かってなかったらやってねーです！だからこそ早く奴を追わなきゃいけないですよ！」

何を言っても聴く耳を持たない真那を追いかけている琴里はそろそろ体力の限界が来ていてしまっていた。それもそうだ。相手はDEMの元No.2であり、こっちはヘラタトスクの司令官ではあるが体力も身体能力もただの中学生。体力や脚力で勝てるはずがない。琴里は足が止まってしまい、また逃げられるのかと内心諦めかけていたが、通路の先から部下である中津川宗近と椎崎雛子が歩いてきていることに気づいた。

「しめた！中津川、椎崎！理由は後で話すから真那を捕まえなさい！」  
「わ、分かりました！」

中津川と椎崎は戸惑いながらも琴里の命令を遂行しようと、走ってきた真那に掴みかかろうとする。

「私をあんまり舐めねーで下さい！」

そう言う真那は捕まえようとしてきた2人の肩に手を置き、ハンドスプリングの容量で2人を飛び越え、一回転して華麗に着地した。

『なッ……!?!』

琴里たちは予想外の避け方に驚きを隠しきれずに体が固まってしまう。その隙について真那は走り去ってしまった。

数分後、琴里と中津川と椎崎は一緒に歩いていた。琴里は真那が逃げた後少し休憩し、中津川と椎崎になぜ真那を追いかけていたのかを説明した。

「まさかあんな避け方をされるとはね…」

「すみません五河司令…私たちが不甲斐ないばかりに…」

「いいのよ。元はと言えば私がかちゃんと捕まえとけばよかったんだから」

そう言つて琴里は土道から貰つたチュツパチャプスを舐め始めた。

「そうですか…。あ、土道くんからチュツパチャプス貰つたんですね」

「ああ、これ買つてきてくれたのよね、ありが——」

「五河司令！」

琴里の言葉は椎崎とは違う女性の声に遮られた。

「ん？どうしたの箕輪。そんなに慌てて」

箕輪と呼ばれた女性は大きく息を切らしながら言う。

「霊波反応が…確認されました…。しかも、霊力値がマイナスを示しています！」

「何ですって!?!それは本当!?!」

そこにいた3人は目を見開き、そのうち琴里は声を張り上げた。

「本当です。場所は、《天宮ひまわり園》です」

「そう…。反転した精霊が静粛現界…そんなことあり得るの…? 考えでも無駄ね。土道に連絡は？」

「それが、土道くんとは連絡が取れてないんです」

「チツ、何やってんのよ…。兎に角、みんな行くわよ！」

『はいッ!』

そうして琴里たちは通路を走つて行った。

「ふふっ」

誰もいなくなった通路にナニカの笑い声が響いた。



「あれっ?…ここ何処だ?」

土道はぼーっとしながら歩いてきたため、いつの間にか知らない場所に来てしまっていた。

「俺、商店街を歩いてなかったっけ？…まあいいか。ところでここは…《天宮ひまわり園》か。ここにはまだ1度も来てなかったな。でも、冬だからな向日葵なんて咲いてるわけ…」

そう言った土道が徐に園の中を覗くと、そこには季節外れも甚だしい向日葵が1本、少しも枯れることなく立派に咲いていた。

咲いてるんかい！と心の中でツツコミをいれ、何故こんな冬に向日葵が咲いているんだ？と思っているとそこに彼女<sup>ソレ</sup>は現れた。

そして土道の方をを向き、

「人間、ここはどこなの？」

と問いかけてきたのであった。



## 彼女の名は風見幽香

冬だというのに力強く咲くひとつの向日葵の前に彼女が立ち止まると土道の方を向く。

非現実的な光景の中で平然と立っている彼女。まるで名絵画から抜け出してきたような、いや、絵では絶対に表せられない美貌。少しウェーブがかかった新芽のような明るい緑色のセミロングの髪、血のように紅い眼、白いブラウスに赤いチエツク柄の上着とスカート着て、襟元には黄色いリボンを付け、日差しが強くも無いのに差している日傘は彼女の魅力を引き立てている。異常なまでに美しい彼女との出会いは土道が十香と出会った時と状況が似ていた。

「ねえ、その人間」

「——っ！」

彼女は土道と目が合うとすぐに話しかけてきた。

状況は似ているが、彼女と十香から感じるものは決定的に違う。

そう、決定的に違う感じるものとは——

「此処は、何処かしら？」

——恐怖感だ。

彼女の透き通った心地よい声の音からは考えられないような恐怖感が土道を襲う。

十香と出会った時、土道は周りの光景の異常さをも圧倒する美しさに感嘆して声を発することができなかった。しかし彼女の場合、土道はその美しさをも圧倒する威圧に恐怖して声が発することが出来無かったのだ。

土道の人間としての本能が警報を鳴らしている。種族としての次元が違う、アレから逃げないといけない、アレに近づいてはいけない、と。土道はその場から逃げ出そうとしたが、思いとどまった。逆にここで逃げてしまうとアレを怒らせてしまい、即座に殺されてしまうかもしれない。そう考えた土道は彼女の方を目を向ける。

彼女は苛立っているようだ。日傘を指でトントンと叩いている。

「こ、此処は…天宮市にある《天宮ひまわり園》だけど…」

「そう、知らない場所ね。それと、女を待たせる男は嫌われるわよ」  
「うっ……………」

女性を待たせたことが何度もある士道にとってその言葉は心に深く突き刺さったようで、むねの辺りの服を掴み半歩下がった。

「そ、それはいいとして！君は自分でここに来たんじゃないのか？」

「違うわ。誰かさんが私をここに飛ばしたみたいね」

「そ、そうなのか…」

士道は彼女は自分が飛ばされたことを知っていたので精霊ではないことを確認する。しかし、そうなるると一体彼女は何なのだろうか？と士道は疑問に思ったので彼女に直接聞こうとしたが、

「あのスキマめ、次会ったらぶっ潰してやるわ」

と不穏な言葉が聞こえたので止めることにした。怖い。

「そう言えば」

彼女は士道の目を見据えて言ってきたので、士道はどんなことを言われるのか戦々恐々としていたが

「あなた名前はなんて言うの？」

「…へ？」

何とも普通の質問だった。

「へ？ってなによ。名前よ、なま え！あなた自分の名前もわからないってわけ？」

突拍子もない質問が来るかと思っていた士道は余りにも普通の質問に気が抜けた声を出してしまった。

「な、名前ね！ははは…。俺の名前は五河士道<sup>いつかしどう</sup>」

「ふーん。士道、ね。」

「……………」

自分から名前を聞いたのにそこまで興味のなさそうな彼女の反応に少しムツとなった士道だったが、機嫌を損ねたら怖いので何も言うことができなかった。

「君の名前はなんて言うんだ？君も俺が君君言うのは嫌だろ？」

「そう、ね。人間のあなた如きが私と対等に話すのは嫌ね」

「は、ははは……………」

彼女に全く敵わないことはわかっているが流石の土道も腹が立つてきた。

「冗談よ」

冗談に聞こえないからタチが悪い。

少し時間を空け、彼女は土道に小さく微笑みかけながら言った。

「私の名前は、風見幽香かざみゆうかよ」

「ゆう、か…」

土道が幽香と名乗った少女に先程まで感じていた印象は一転して、冗談も言える可愛らしい少女となった。

「あ、冗談って言ったけど、さんは付けなさいよ」

前言撤回。土道は内心ため息をついた。

## 五河琴里の憂鬱

士道と幽香が出会う数分前

士道が先程まで検査を受けていたヘラタトスクの施設では厳戒態勢がしかれていた。その施設の中の戦艦ヘフラクナシスの艦橋によく似た部屋にヘフラクナシスの搭乗員たちが皆集まっている。部屋には電話の発信音と上下させたつま先が床にあたる音が響いている。その二つの音をどちらも出しているのは五河琴里、戦艦ヘフラクナシスの司令。彼女は留守番電話サービスに移ろうとしたケータイの電源を落とし、まだ舐め始めて間もないチュツパチャプスを噛み砕き、大袈裟に机を叩いて立ち上がる。

「家の電話にも出ないし、士道はケータイも持たないでどこをほつき歩いてるのよ！」

彼女は彼女の兄である五河士道が電話に出ないことに腹を立てていたのだった。

「反転した精霊が現れたかもしれないっていうのに…」

「落ち着いてください司令。貴女がこの状況で冷静さを欠いたら誰がこの場を纏めるんですか」

と、琴里を宥めたのはヘフラクナシスの副司令である神無月恭平。

「…そうね。私がどうこう言っても何も変わらないわ。たまには役に立つじゃない、神無月。礼を言うわ」

「恐縮です」

そう言つてニコリと微笑みながら頭を下げた神無月だが、彼はドがつくほどの変態である。元ASTの隊長で優秀な魔術師<sup>ウィザード</sup>であるが、物凄く変態である。今は常人ぶっているが、琴里に椅子にされたり、豚と言われて悦ぶ変態である。

閑話休題。

神無月は懐からチュツパチャプスを取り出すと琴里に渡した。それを受け取った琴里は包装を外し、啜える。

「…よし。じゃあ、切り替えていくわよ！」

『はっ！』

搭乗員達は琴里の呼び掛けに対して力強く返事をした。しかし、琴里は皆に呼び掛けたわけではなく、自分を奮い立たせるために言ったのだった。だが、琴里はそれをここで伝えてしまうと折角皆の締まった気が緩んでしまうと思い、敢えて言葉に出さなかった。

「霊波反応が確認された《天宮ひまわり園》の映像を早めに出して！それと土道も探しなさい！」

『了解！』

搭乗員達が作業に取り掛かると琴里はぼーっと考え始めた。

「(すっかり真那にも逃げられたし、土道は何処に行っただか。あの兄弟はどれだけ私の胃を痛めつきたいのよ…。もしかしたら土道は《天宮ひまわり園》にいるのかも…。ってそんなわけないわね、うん。ないない)」

「司令！ひまわり園の映像をメインモニターに映します！」

男性のクルーが叫ぶとメインモニターに映像が映し出される。

それは何ともおかしい光景だった。

冬なのに立派に咲き誇る一本の向日葵。その隣に佇む日傘が似合う絶世の美女。それに相対する青髪の青年。

青髪の青年。そう、五河土道である。

「……………ん!?何であなたがそこにいるのよ！土道おおお！」

琴里の声が部屋で反響する。

琴里の悲痛な叫び<sup>胃</sup>声は何時になったら消えるのだろうか。

## 殿町くんは唯一の友達

幽香さんに名前を教えた土道は、会話が一段落ついたために油断していた。

「で、土道」

「ッ!?」

幽香との会話に少なからず慣れた土道は気が緩み、心に隙が生まれてしまった。幽香の口から奏でられたその音は土道の心の隙間に入り込み、揺さぶった。

名前を呼ばれた。

たったそれだけの事。しかし土道の中では得も言えぬ感情が沸き立った。歓喜か、感動か、はたまた恐怖か。ソレが何かは分からないが胸の高鳴りが止まない。今は冬であり、此処へは歩いてきた土道だが、少し体が火照ってきていた。そしてカラカラに渴いてしまった喉を少しでも潤す為に唾を飲み込んだ。

名前を呼んだ事が土道の精神を磨耗まもうしたことを幽香は分かっているのか、分かっていないのか、容赦無く問い掛けた。

「あなた此処に何の目的で来たのかしら?」

胸の高鳴りが少し収まって来た土道は、幽香の質問をなんとか答えようとするが、

「何の目的って、そりゃあ……」

その先の言葉が出なかった。

考えてみると自分は何故此処にいるのだろうか?と疑問が浮かび、此処へ来た経緯を振り返る。今日は自分の検査だったのでヘラトスクの施設へ訪れ、真那を襲っていた(大人しくさせようとしていた)琴里にチュッパチャプスを渡し、施設から出て商店街を歩きながら今日の夕飯を何にしようかぼーっと考えて…それから?それからの記憶が全くない。気がついたら《天宮ひまわり園》の入り口に立っていた。

無自覚でこの場所まで来てしまった自分自身に恐怖していた土道に声がかけられる。

「私、女を待たせる男は嫌われるって言わなかったかしら？」

その声で我に返った土道は声がした方を見た。そこには日傘の柄を指でトントン叩き、真紅の双眸を鋭く尖らせてこちらを見つめる、いかにも不機嫌そうな幽香が立っていた。

「すつ、すまん。…俺は此処に目的があつて来た訳じゃ無いんだ。ただぼーっと歩いてたらいつの間にかここに居たつて言うか…」

「そう。用がないなら家に帰りなさい。それと、歯切れの悪い男は女に好かれないわよ。土道、あなたつて女友達いるの？」

「ぐふつ………お、女友達ぐらい、俺にも………」

幽香の言葉はまたも土道の胸に突き刺さり、女友達ぐらい俺にもいるわ！と言いかけた。しかしよく考えてみると、十香ら精霊達は友達とは違うし、一亜衣、人麻衣、称美衣は友達とは言い難い。

土道の内に電流が走った。

「俺、女友達いなくね…？」

ふるふると震える唇から発せられた言葉はなんとも悲しいものだった。

それが余程ショックだったのか、土道は両手両足を地面につき、うなだ項垂れた。

「凶星だったの!?!…えつと……もう家に帰れば？」

軽く言った言葉で予想以上にダメージを負っている土道に対して幽香は少々いたたまれない気持ちになったので、少し優しく（してるつもりで）家に帰るように促した。

「そう考えると男友達も殿町だけじゃないか…？友達は大事にしないとな…ははっ」

その言葉が耳に届いていないのか、土道は膝を抱えて座り直す——いわゆる所謂体育座り——となにかブツブツ言いながら光のない目で虚空を見つめている。

見るに見かねた幽香は土道の背中を結構な強さで叩いた。

「おつふオッー！」

「男ならしやんとしなさいな。ほら、ハーブティーでも飲んで少し落ち着きなさい」

背中に走った強烈な痛みで我に返った土道は幽香が差し出してきたソーサーとカップのセットを受け取った。カップの中には紅茶というよりは緑茶に近い色合い、透き通った黄金色の水が湯気を出している。

「あ、ありがとう。幽香、さん。でも、これどこから…」

「秘密よ」

幽香は満面の笑みでそう言ったので土道は何も言うことが出来無かった。もうヤケクソだ、とカップの中身を一気に呷あおった。

「ブフウツ!?!」

そして、全て吹き出した。

程よい熱さと気分が良くなるミントの香りは幽香が気遣ってくれたのだろう。とても良かった。

だが、しよっぱかった。

土道は何度も噎むせた後、叫んだ。

「しよっぱいッ！態とやっただろ!?!」

「あら？ごめんなさい。砂糖と塩を間違えてたみたいだわ。態とではないわよ」

信用ならない。

土道は幽香の事を全然知らないが、一つだけ分かったことがある。

この人絶対DSだ



ここは何処だかよく分からない場所。

そんな良く分からない場所に和室があり、その中テレビを見て笑い転げてる美女がいた。

「あつはははははは！あの子、『ブフウツ!?!』だって！リアクション芸人になれるわ！そう思うわよねえ？藍」

藍、と呼ばれたもう1人の美女は9本の尻尾を揺らしながら呆れたように言う。

「紫様…。結界の維持をしている私がそつちを覗いていられると思いま



すか？暇だったら手伝って下さいよ」

「まだダメよ。藍だつて映画のクライマックスまで見たらオチまで見たくなるでしょう？だから無理よ」

そう言つと紫様と呼ばれた美女はテレビに向き直つてしまった。

「はあ・・・」

和室に溜め息が心なしか大きく聞こえた。

## 花の好きな妖怪とコート

幽香は砂糖と塩を入れ換えた人物に心当たりがあるようで、「またスキマか」と不快感を顔に滲ませながら眩き、日傘の柄を握り締めてぎちぎちと音を鳴らしていた。

そんな幽香に土道は苦笑いを浮かべたが、すぐに神妙な面持ちになり話を切り出す。

「幽香さん。貴女に聞きたいことがあるんだ」

真剣な話の気配を感じ取ったのか、幽香は柄を握る力を緩めて土道の方へ体を向き直し言った。

「あら？折角私が気を使って作ってあげたハーブティーを吹き出して台無しにした土道くんが私に何を聞こうっていうのかしらね」

さっきの事を相当根に持っているみたいだ。

「そ、それは態とやったんじゃない、余りにもしよっぱくて反射的に吹き出してしまった訳で…」

「ふーん…私のお茶は飲めないって訳ね。まあ、それはいいけど、紅茶に使った子が可哀想だわ。私が育てた子達が、ね」

私が育てたを強調して言ってきた幽香の口調はふぎけ半分という感じだったが、その表情は我が子が死んでしまった親の様に沈鬱ちんうつだった。

「…すまん。態とやった訳じゃないのに強く言っただけ悪かった」

「もういいわ、終わった事よ。それに私の不注意でもある訳だしね。」

「次の機会があれば良いのを入れてあげるわ」

「そうか…それはありがたいな。次の機会があるように努めることにするよ」

「そう、せいぜい頑張りなさい」

と素っ気なく言った幽香はくるりという擬音が聞こえてきそうな軽快な所作で向日葵の方へ向くと歩き出した。それにつられて土道は幽香の後ろを歩き出す。

日傘をくるくる回して歩く幽香。その後ろ姿に魅入られそうになるのを堪えながら土道は話を切り出した。

「——幽香さん。貴女は一体何者なんだ？」

「それはどういう意味で言っているのかしら？」

一瞬だけ動きが鈍くなった幽香は声を少し低くし、質問を質問で返した。

「最初に幽香さんと会った時、貴女は俺のことを『人間』と呼んだら？普通、同じ人間同士なら相手のことを人間なんて呼ばない。その後も、『人間ごとき』と俺のことを別種族のように言っていた。だから、幽香さんは人間じゃない別の違うものなんじゃないのかって思ったんだよ。それに、幽香さんは人間とは思えないくらい、…そ、その…美人だから……」

「ん？最後なんて言ったの？」

「な、何でもない！」

土道は幽香に美人と言うのが気恥しくて声が小さくなってしまった。聞き返され、先程に増して恥ずかしくなった土道はお茶を濁した。

余談だが、その言葉は幽香の耳にしつかり届いており、後々弄られることになるが今の土道には知る由もない。

「……そうね」

向日葵の前で先程の様にぐるりと回り、土道へと体を向けた幽香は一拍置いて言い放った。

「私は『妖怪』よ」

「！妖怪…あの河童とか鬼とかで有名な？」

「まあ、その括りで合っているわ」

土道の思い浮かべた妖怪と幽香の言っている妖怪に齟齬がないようだ。

妖怪。

それは昔から日本人に畏れられてきた怪異、異形。人を化かす者、驚かせる者、食う者など多種多様であり、時には無害な者、有益な者もいるらしい。だが、非科学的なもので今では全くと言っていいほど信じられてはいない。逆に、妖怪は存在すると言っている者がいたら普通は正気を疑われるであろう。

自分のことを妖怪だと言っている女性が目の前にいる。普通なら彼女を可哀想な目で見るだろう。そう、普通ならだ。

土道はこれまで精霊という非科学的なものを何人も見てきた（と言うより救ってきた）。それならば妖怪がいても不思議ではない。それに、彼女が妖怪であるならば美しすぎるその容姿や最初に対面した時の威圧感、どこからともなくティーセットを取り出したのも納得できる。そのせいかな、土道は幽香が妖怪だとすんなりに受け止めることができた。

「そうか、妖怪か…」

「あら、土道は私が妖怪だと知って驚かないの？ 大体の人間は驚いて逃げてくのだけれど」

意外だわ、と呟く幽香。その言葉に土道は頭を掻きながら口元を緩ました。

「俺は何度も精霊を見てるから耐性が付いちやったのかもな」

「精霊…？ 妖精みたいなものかしら？」

妖精、とまた新しい単語が出てきた。これは話していたらキリがないだろう。そう思った土道はその話を次に会う時へと持ち越そうとした。

「それは話すと長くなるからまた次の機会に話すよ」

「次の機会なんてあるかしら」

「あるさ、俺はまた此処へ来る。幽香さんに美味しいハーブティーを入れてもらう約束があるからな」

呆氣に取られてしまった幽香だが、すぐに気を取り直した。

「…：…そうだったわね。茶請けの菓子でも持ってきてなさい」

「おう。いいのを持ってくるよ」

一旦会話が途切れるが、すぐに土道が質問をかける。

「幽香さんは自分の事を妖怪って言ってるけど、なんて種族の妖怪なんだ？」

「私に妖怪の種族なんてないわ。私は、『風見幽香』は私だけ、同じ種族なんていない単一種なのよ。強いて言うなら、花が好きな妖怪とも言っておくわ」

「聞いて悪かった」

士道はあまり聞いてはいけない事だったと己の失言に後悔する。周りには同じ種族同士がいる中にぼつんと1人(妖怪)だけいるのはどれだけ辛かっただろうか、そしてその事を思い出して話すのも辛かっただろう、幽香に悪いことをしてしまったと士道は謝罪した。

だが、

「なんで謝るのよ?…ああ、私が単一種だから? 私は私だけで良かったと思っっているわ」

「へ…?…なんでだよ?」

幽香は士道が考えていたことなど微塵も考えていなかったようだ。つまり謝り損である。

「だって私が何人もいたとしても、殺し合いが始まるだろうし」

「なツ:!?何でそんな事するんだよ!?!」

士道には幽香が言っている事が理解出来なかった。

「理解できないって顔をするのは無理もないわ。私は妖怪、士道は…人間だからね、価値観が違うのよ。人間と猿じゃ価値観が絶対違うでしょう?それと同じよ」

「それは——」

そう言われて士道が思い出したのは狂三だった。

ときよきくるみ  
時崎狂三、通称ヘナイトメアと呼ばれる『最悪の精霊』。彼女は躊躇なく人を殺し、その能力によって現れた彼女の分身体が殺されても何とも思わないようである(彼女自身が分身体を殺したこともある)。それに、DEMのアイザック・ウエストコットも同じようなものだろう。

彼女らを思い浮かべてしまった事で、幽香の言葉を否定することが出来なかった。

「分かったかしら?」

「…ああ」

「それならもう帰りなさいな。私もやることがあるのよ」

幽香はしっしっしと追い払う仕草で士道が帰ることを催促した。だが士道は耳を貸さずに幽香を見つめる。

「早く帰りなさいって——」

「やる事って元の場所に戻る方法を探すことだろ？」

その様子に腹に据えかねた幽香は土道を殴ろうとするが、その拳は土道の言葉によって顎を撃ち抜くすんでのところまで止まった。

「……何故そう思ったのかしら？」

「勘だ」

「は？」

「勘」

「……………」

土道の答えに呆れた幽香はモノも言えなくなってしまう、ひまわり園に静寂が走った。しかし、すぐにその静寂は幽香の大きな溜息によつて破られた。

「はあああ…。そうよ、私は私の畑に戻る方法を探しているのよ。ほら、もうこれで気が済んだでしょう？帰りなさい」

「それさ、俺に手伝わせてくれよ」

「は？手伝う？何を？」

「幽香さんの元いた所へ戻る方法を探すことをだよ」

「は？私1人じゃ帰る方法が見つからないって言ってるの？」

「違う。俺がただ手伝いたいだけだ」

「そう、もう勝手にしなさい」

「そうか！じゃあ、早速——」

ピリリリリリリリリ

土道が幽香の話し合いを始めようとした瞬間、携帯電話の着信音が響く。誰だこんな時に、と電話の画面を見ると琴里と書かれていた。土道は電話に出る。

「どうした琴里」

『やっと出たわね！どうしたじゃあ無いわよッ！電話に出ないと思つたら、何であなたはそんな所にいるのよ！早く基地に戻ってきなさいッー！』

携帯電話から聞こえてきたのは鼓膜を破かんばかりの怒号だった。

「な、なにをそんなに怒ってるんだよ琴里。落ち着けよ」

『落ち着いてられるわけが無いでしょ?! いいから早く戻ってきなさい!』

「お、おい!」

通話を切られてしまったてはどう仕様もない。掛け直したところで出てくれないだろう。つまるところ一度基地に帰らなせればならぬという事だ。

「……すまん幽香さん。妹に呼ばれから一度帰ることになった」

「元氣な妹ね。大事にしなさいよ」

「勿論。じゃあ、ハーブティー楽しみにしとくよ」

「来なくてもいいわよ」

「いいや来るさ」

「そう」

言葉を掛け合うと、土道は何かを思いついたかのように手をポンと叩き、自分の着ているコート脱ぐと幽香に差し出した。

「何よこれ」

「寒そうだったから」

「絶対違う意味があるでしょ」

「バレたか。これを渡しとけば幽香さんと会うきっかけになるからさ」

「…一応貸してもらっておくわ」

「なら良かった」

そう言うと土道は出口へ向かって歩いていった。

幽香はその背中を見ながら土道には聞こえないような声で呟いた。

「変なヤツ…ふふっ」

コートにはまだ温もりが残っていた。

## 邂逅前

### 《太陽の畑》

雲が一欠片もない蒼の天井の真ん中に燦々さんさんと輝く太陽の下、辺り一面に広がる向日葵たちは皆、その顔を必死に太陽へと向けている。

私は風見幽香、どこにでも居る花が好きな妖怪。

そして此処は私の庭である花畑。人間は此処を太陽の畑と呼んでいるらしい。太陽の畑という名前は私もなかなか気に入っているの  
で、その名前を考えた者を褒めてやりたい。

「〜♪」

今は鼻歌交じりに日課である花への水やりをしている。すると花たち、主に向日葵から感謝や歓喜の感情かが伝わってきた。心なしかいつもより瑞々しい気がする。

「美味しい？そう。なら良かったわ」

夏だから水を小まめに上げないと花はすぐに枯れる。逆に上げ過ぎてしまうと水が温まってしまい、根腐れするので注意しなければならぬ。素人なら難しい調節なのかもしれないが、私は慣れてしまっているのを目をつぶってでもできるだろう。

軽い足取りで適切な量の水を花に上げていると、畑の奥の方の花たちが騒がしくなった。何か、と急いでそこへ向かうと、そこには目を疑う光景が広がっていた。

1本の向日葵が枯れてしまっていたのだ。茎は茶色に変色し、花弁は萎れしお、項垂れている頭は今にも落ちてしまいそうな状態だった。

昨日見たときはこうなってしまう兆候など微塵も感じなかったのに。私は目利きが悪かったのか、いやそんな筈はない。そうすると何故……。疑問が頭の中を交錯している下、私の胸の奥から怒りがふつと沸き上がってくる。

それは自分自身へ向けてのものだった。この子への対外的な影響があったとしても、その異変に気づき、それからこの子を守ることが出来なかつた自分へ対しての怒り。

周りの子たちは「幽香さんは悪くない」と慰めてくれるが、怒りは



鎮まらない。

そして、怒りで感覚が鈍ってしまった私は足元に開いている無数の眼が覗く空間の切れ目に自分が落ちていることに気づけなかった。

「なツ…!?!」

気づいた時には遅かった。

手を伸ばし、地面に手をかけようとするがその前に空間の切れ目は閉じてしまう。怒りで溶岩のように熱くなっていた思考回路は瞬間的に冷えていく。冷静になった頭の中ですべて繋がった。全ての元凶はあのスキマ妖怪で、私を何処かへ飛ばすための罠だったという事だ。

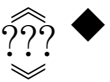
このスキマに入れられてしまえば何もすることが出来ない。ただ、私の静かな怒りが口から零れた。

「スキマ、覚えておきなさいよ。次にあつたらぶつ殺してやるわ」

誰にも届くことのないその言葉はこの空間へ吸い込まれていく。

「しかし、アイツは私を何処まで飛ばすつもりかしら」

考えても仕方ないわね、と落ちているのか浮いているのかよく分からない浮遊感の中で私は目を閉じた。



此処はある者によって作られた場所。どこまでも暗黒が続く果てのない世界。

そんな場所にナニカがふよふよ浮かんでいる。

「…ふむ。第二の精霊を態と解放したか。ウエストコットめ、面白いことを考えるじゃないか」

ソレは男か女かさえも分からない、ノイズで覆われた人型のモノ。ソレは機械で変換したような声で独り言を呟いている。何も無いところを見つめ、何かが見えているかのよう。

「可愛い娘が傷つけられるのは好ましくないが、これもまた一興……」

「なかなか楽しそうなことをしてますわね」

【!?】

と、ソレ以外何もいない筈のこの世界にソレとは全く違う女の声が響いた。そのことに驚いたソレは声のする方に振り向き（ノイズで見えないが、そんな気がした）、その声の主を見つけるとため息混じりに言った。

【…君が何故ここにいる、八雲紫】

「酷い言い草ですわね、あなたは私の能力ぐらい知っているでしょう、  
『#####』。…あら？」

八雲紫と呼ばれた女はソレの名前を読んだつもりだった。だが、名前がノイズのようなもののせいでかき消されてしまった。

【その名前はよしてくれないか】

「ああ！そうだったわね。今は『#####』だったわね…ってこれもダメなの？」

紫は頬を膨らませて、ぶーと不満な顔をする。

【その歳でその顔は辞めてくれ。…そうだね、人間にはへファントムと呼ばれているからそう呼んでくれ】

「なによその歳って、酷いじゃない。あなたの方が若いからってそんなこと言っつていいと思ってるの、へファントム。私怒るわよ？ぷんぷん」

【……………】

「ああっ！そんな養豚場の豚を見るかような冷たい目でみないで！『かわいそうだけど明日の朝にはお店の店先でならば運命なのね』ってかんじの！」

自らをへファントムと名乗ったソレは紫を蔑んだ目で見つめているようだ。紫はそのことが分かっている。だがへファントムは何故わかったのか敢えて聞かなかった。

【茶番はもういいよ、用件はなんだい】

へファントムがそう言うとき紫から巫山戯た雰囲気が消えた。

「…こつちの世界に妖怪1人、いや、1妖怪送るわ。私もサポートするから、…よろしく頼むわ」

「いや、辞めてくれないか。こっちは忙しいんだ。それに、よろしく頼むって何を？」

「その妖怪をあなたのやってるゲームに混ぜて上げて下さいな。…あら、もう時間だわー。もう戻らなきゃ、ではご機嫌よう」

【あ、ちよつ……】

あなたに拒否権など無い、とばかりに言うことだけ言って紫は消えてしまった。何をすればいいのかわからず、少しの間へファントムは呆然とするしか無かった。

◆  
《天宮ひまわり園》

私が目を開けるとそこには一本以外全て枯れてしまっている向日葵畑が広がっていた。一瞬、太陽の畑なのではないか、と思ったが太陽の畑はこんな小さくない。

そのことに安堵すると同時に空気が冷たいことに気がついた。

「寒っ。向日葵は枯れてるし、寒いし、冬になってるわね。あのスキマ、枯れてる向日葵の前に私を飛ばすなんていい度胸してるわね。…でもこの子だけなんで咲いているのかしら」

向日葵のことは気になるが、この場所が何処なのかを先に知りたい。周りを見渡すと愛用している日傘が少し先に落ちているのが見つかった。歩いてそこまで行き、日傘を手に取ると土埃を払い、そのまま日傘を差す。

「これがこっちに来てたのは不幸中の幸いね。さて、これからどうしましょうか」

と、独り言を呟いていると向日葵の正面の方から人の気配を感じる。まずはここをどこか聞かないと始まらないわね、と向日葵の正面に立つ。

そこには中肉中背の割と端正な顔をした青年が立っていた。なん

てことない普通の人間だ。脅せばすぐにここが何処かぐらい吐くだろう。

「ねえ、その人間」

「——っ！」

「此処は、何処かしら？」

それから少し時間が経ち、青年は帰って行った。

彼は五河士道と言うらしい。なんやかんやでまた会うことになり、何故かコートを渡された。不思議な奴、そう思った。士道のこととは殆ど知らない。だが、一つだけ言えることがある。

『これを渡しとけば幽香さんに会うきっかけになるからさ』

この言葉、言ってるて恥ずかしくなかつたのかしら？

## 兄妹（痴話） 喧嘩

「気が付いたらひまわり園に居たあ？私の愛しいお兄ちゃんはその歳で認知症にかかっているのかしら！」

〈ラタトスク〉が保有するとある施設のとある部屋。部屋の扉は閉まっているのにも関わらず、部屋の外まで聞こえる、怒気のはらむ悲鳴のような少女の声が響き渡っていた。

その声に驚き、なんだなんだ、と声に釣られてきた従業員が扉についている窓から中を覗き込む。しかし、あああ…いつもの兄妹喧嘩か、とすぐに興味を無くすと自分の仕事へと戻って行った。

その喧嘩している（喧嘩はしていない）兄妹というのは…御察しの通りだろう、士道琴里兄妹だ。

「許してくれよ、琴里。本当に気づいた時にはひまわり園に居たんだった」

「許してくれで済んだら警察は要らないのよ！」

「今の話で警察は要らないだろ…」

「…ツうるさい！あなただけ危ない場所にいたか分かっているの?!」

琴里の怒りはどんどんヒートアップしている。自分の兄が心配が故の怒りなのだが、あまりに熱を持ち過ぎてオーバーヒートしかけていた。

「反転した精霊に話しかけるなんて、士道がちよつとの事じゃ死なないからと言っても、いくら何でも生き急ぎ過ぎよ！精霊を助けたい気持ちは分かるわ。それでも時と場合を考えなさい！」

「まあ、そうだな。でも、幽香…さんは精霊じゃないぞ？」

「私たちがどれだけ心配したと…え？」

士道の一言によって琴里の熱は一瞬で冷え、まともな思考が戻ってきた。しかしその代わりに無数の疑問が頭を埋め尽くす。

「ちよつと、何よそれ。どうゆう事よ」

怒涛のような言葉の猛襲が止んだことに士道は内心ほつとする。

そして土道は幽香との会話を事細かく説明し、また会う約束を取り付けたことと、幽香が元にした世界への帰還の手助けをすると決めたことを琴里に話した。しかしその話が信じられないのか、琴里は訝しげ眼差しで聞き返した。

「それ：精霊に適当言われただけなんじゃないかしら？」

「いや、幽香さんは絶対に精霊じゃない！」

「か、顔が近いわよ！な、何で絶対違うって言い切れるのよッ」

自分が言ったことを切羽詰まった様子で肩を掴まれて否定され、琴里は顔を赤くしてたじろいでしまう。

「幽香さんは精霊なんかよりもっとヤバい。計測機だと同じ反応かもしれないが、アレは完全に別のモノだよ。直接会ってみるとわかる、自分の生物としての本能が警鐘を鳴らすんだ：『コイツは危ない』って…」

土道の手は小刻みに震え、少し顔の血の気が引いていた。それに気づいた琴里は追い打ちをかけるように土道の股間を蹴り上げる。

「いい加減離しなさい…よっ！」

「とおうふッ!?……………!!……………!!」

蹴られたブツを押さえて蹲り、声を出す事すらできずに悶絶している。そんな土道に琴里はフンツと鼻を鳴らして見下す。

「そんなに危険だと分かかってなんで彼処あそこにずっと居続けたのよ！」

「に、逃げれなかったんだよ…恥ずかしながら恐怖で脚が竦んでたんだ」

痛みがひいてきた土道は立ち上がるが、少し腰が引けている。

「それなら何で途中で会話を切るなりして私に電話をかけなかったのよー！」

「そ、それは…」

「もう少し私達を頼りなさいよー！」

「！」

「土道は1人じゃないのよ。私達が付いているんだから、もっと私達に助けを求めなさい！それに、義妹いもむすめとしてお兄ちゃんが心配なのよ」

「…分かった、これからはみんなを頼りにするよ。あと、ごめんな。兄

の俺が妹を心配させて」

司令官としての琴里と、妹としての琴里の言葉は土道を猛省させた。分かればいいのよ、と琴里。

「…それにしても『妖怪』ねえ…空想上のものだと思ってたけど…」

「ふむ、最近だと『四次元ババア』という妖怪が流行ってるみたいだね」「へえー、って令音?! いつの間に来てたのよ」

戦艦へフラクナシス<sup>むらさめれいね</sup>の解析官である村雨令音がいつの間にか土道と琴里が話している部屋に居たのだ。

「『お兄ちゃんが心…』」

「ああああああ!! 分かった! 分かったからもういいわ!」

自分が言ったことが今になって恥ずかしくなってきた琴里は大声で令音の声をかき消した。

「そ、そうだ! その『四次元ババア』ってどんな特徴なの」

話を逸らした。

「む、そうだね。四次元ババアは神出鬼没で面倒臭いことを押し付けてくる妖怪。四次元ババアはある空間と空間を繋ぐ力を持っていて、繋いだ空間から手だけを出して悪戯したりもするらしい」

「よく知ってるわね令音」

「つい最近そんな記事を見たのでね」

「ふーん、じゃあ令音は妖怪について調べといてくれるかしら」

「分かったよ」

と言って令音は部屋を出ていった。

「じゃあ土道は次にその…幽香さん? に会う時に備えておきなさい、今日は帰っていいわ」

「おう。頑張れよ琴里」

くしゃくしゃと琴里の頭を撫でてやると、ん、と嬉しそうに目を細めた。

撫でるのを止めて少し残念そうな琴里と一緒に土道は部屋を出た。土道は今日の夕食を考えながらこの施設の出口へと向かっていくのだった。

帰り道の道路に倒れている少女が精霊だとまだ土道は知らない。



## 精霊・二亜

「――よし、これで足りるだろ」

琴里に帰宅を許されてビルを後にした土道は今日の夕飯の材料を  
買う為に、商店街に来ていた。しかし今、土道は買い物をし終え、ぽ  
けーっとしながら家への帰路を歩いていた。

「しかし、今日は疲れたな…まあ、あんな事があつたんだから仕方ない  
な」

とボヤくと疲れの原因を思い出す。

緑の髪、赤い目、赤いチエツク柄の上着とスカート、特徴的なピン  
クの日傘。その全てが相俟って異常なまでの魅力を醸し出していた  
彼女――風見幽香。それに上書きするように放たれた威圧は今思い  
出しただけでも悪寒が走る。そんな彼女が元いた世界へ戻る手伝い  
をする約束をしてしまったが、自分が何かできるのだろうか？それに  
会いに行く約束もしているため、近いうちにひまわり園にも行かなけ  
ればならない。

「あー、やることが多いぞ。まあ、今日は難しいこと考えずに帰ろう」  
と、思考を放棄し、商店街抜ける角を曲がったところだった。

むぎゆ。

「ぐえっ」

「ん？」

何かも硬いものを踏んだ感覚と、足元から玩具の音が出るカエルを  
握りつぶしたかのようなくぐもった声が聞こえてきた。視線を下へ  
送ると、自分の足が少女の頭を踏んづけていた。土道はそれ理解する  
のに数秒用したが、その少女から足をどけ、買い物袋を地面に置くと  
慌てて声をかける。

「うわっ!? す、すみません! だ、大丈夫ですかっ!?!」

少女の頭がギギギと音の鳴りそうな動きでこちらを向いた。する  
とその容貌が見て取れた。

少しだけ吊った目、端正な顔立ち、頬が痩せこけていて目の下には  
なかなかの大きさの隈が。土道より1、2歳年上なのだろう。しか

し、その疲労が色濃く出た顔は歳相応とは言い難い代物であった。そして、薄い唇から蚊の鳴くような声でポツポツと言葉が紡がれた。

「だ、いじよば、ない……」

そう言う少女はまた道路にキスを始めてしまった。

「ど、何処か痛いんですか？救急車呼びましようか!？」

自分が踏んでしまったからではないか？それとも持病かなにかか？と、土道は最悪の事態が起こらないように頭を巡らせる。

「——かーいた……」

それを遮るかのように少女が声を発するが、土道は聞き取れなかった。

「すみません、もう一回お願いします」

「お腹、空いた……」

「……………へ？」

ぐぎゅるるるという腹の虫の音なんとも間抜けな声が重なり、思考が止まる土道だった。

「いやあー、悪いね。少年」

数分後、土道は少女を背負っていた。先程より少しハリが出ている少女の声を聞くと土道は苦笑いしながらこたえる。

「何事かと思いましたがよ……。道に人が倒れているんですよ？テロかなんかかと……」

「そうだねー。あたしがテロのおかげで倒れていたなら君の左足にトドメを刺されていただろうね」

「うっ、根に持たないでくださいよ……」

「それは無理かなー？だって、女の子の頭を踏んづけたのよ？顔に傷なんてできちゃったら、わたしお嫁にいけない!」

「……………そうですね。悪いことをしました、すみません」

しくしく、と明らかに嘘泣きだと分かる仕草をしながら

そこまで深刻そうではない口調で言われた言葉だが、正論だった。

女の子の顔に傷など付けてしまったら自分も女の子も一生を棒に振ることになるだろう。無論、世間に公表されていない医療用の顕現装置なら跡形もなく治すことが出来るが、一般人が使用することなどできない。

そう考えると自分がどれだけ不味い事をしてしまったのかを士道は理解した。

「まあ、士道くんがお嫁に貰ってくれればそんなこと気にしなくてもいいんだけどねー」

「ブフツ!」

思わず吹き出す士道。

「な、な、何言ってるんですか！初対面の人にそんな冗談は良くないですよ！……?」

突然の求婚？に対して少し叱り気味で大きな声を出した士道だが、少女の言葉に違和感を感じた。

「……さっきなんて言ってみましたか？」

「え?『士道くんがお嫁に貰ってくれば、そんなこと気にしなくてもいいんだけどね』っていったの」

少女を背負いながら歩き続けている士道からの要求は意味不明だと少女は思いながら答えてやった。

「おかしい。何かが…」

「ん?…あつ!もしかして、女の子をおんぶしたのが人生初だった?つまり、わたしが士道くんの初めて貰っちゃたって事ね。どう?初おんぶは興奮した?」

少女は少しだけ膨らんだ——これからの成長の見込みがない残念な——胸を士道の背中に押し付けながら耳元で艶めかしく、悪戯っぽく囁く。

いつもの士道なら、そんなことをされてしまえば顔を真っ赤にし、体の動きがぎこちなくなり、声が震えていたであろう。しかし、今日の士道は気にしていなかった。

「……それだ!」

「…へ?ま、まじで?冗談のつもりだったんだけど…」

いきなりの大声と先ほどの冗談を本気で答えられた少女は間拔けな声を上げ、若干引き気味である。その少女の瞳を見つめようと土道は首を少し捻り、違和感の正体を知れた喜びか、大きな声で言う。

「君が俺の名前を土道と知っていることがおかしいんだよ」

それを聞いた少女は「あ……」と自分のしてしまったミスにようやく気づく。指導に絡ませた腕の片方を解き、頭をポリポリと掻く。

「そっかあ、うっかりしてた。まだ少年からは名前を聞いてなかったね。いやあ、参った参った。家に着いてから言おうとしたけど、バレたからには仕方ないなあ」

そう言う土道の頭の後ろで咳払いをした少女は言葉の爆弾を投下したのだった。

「わたしは二亜、本条二亜。君らが言う精霊って奴だね」

「……………は？」

「あ、漫画家もやってるよ」

## 報告と夕食

「——強大な力を持つ妖怪の次はDEMに囚われていた精霊、ですって?」

琴里が頭を抱えて、唸るように言う。

「ああ、その通りだ」

夕食に出す塩鯖をグリルに入れ火を掛け、土道はさつき起こった信じ難い出来事を琴里に話した。

二亜は自分が精霊だとカミングアウトした後、色々教えてくれた。

DEMに捕らえられて五年もの間監禁されていたこと。輸送機で運ばれていた時に土道が助けてくれたこと。漫画を描いていること。二亜の天使のこと。

彼女が住んでいるマンションへ運び、帰ろうとした。しかし、「もう帰っちゃうん?」と二亜が上目遣い——使い方をよくわかっている——をしてきたことと、二亜の腹の音が「早く飯をくれ」とうるさかったことにより阻止されてしまった。雑炊を作りそれを二亜に食べさせると、今度は漫画作成の手伝いを頼まれ、なくなり手伝うことになってしまった。そこで二亜が長らく休載していた人気漫画『SILVER BULLET』の作者、本条蒼二ほんじょうそうじだと知り驚いたのだが、今は関係ない。

漫画の手伝いも終わり、今度は本当に帰るぞと息巻いていたところで二亜から給料を渡された。受け取れないと突き返すと「なら、その代わりに私とデートしてよ」と二亜が提案してきた。荷物持ちをしてくれと言っている訳だが、断る理由はなかった。

「——そして現在に至るって事だ」

少し長くなってしまう話を終えると琴里はチュツパチャプスを口の中でコロコロ回し、顎に手を当てる。

「……全知の天使へ囁告ラッヅエル篇帙エル、ね。ものすごく厄介な天使が出てきたものね」

「ああ」

士道は短く相槌をうつ。

〈囁告<sup>ラッセル</sup>篇帙〉

この世の全てを見通す、全知の天使。森羅万象全てを知ることができその能力は、あらゆるセキュリティをも意味を無くし、未来のことでさえ見通す。さらにはその聖典の様な天使に未来の事をかき記すことで、それが現実のこととなるのだ。この世界の理をねじ曲げるその力は神にすら近い能力であった。

夕食の準備を進める士道を邪魔しないように琴里は台所の入口から話し掛ける。

「まあそれはともかくとして、デートの約束を取り付けてきたのはナイスよ。こちらとしても動きやすくなるわ」

「まあ、俺が誘ったわけじゃないんだけどな」

士道は自嘲気味に笑みを零し、グリルを開けて塩鯖の焼き加減を確認するとリビングにいる5人の精霊に声をかける。

「——おい、そろそろテーブルを片付けてくれるか？」

『はい！』

元気な五つの少女の声が士道に向けて返ってくる。

十香、耶俱矢、夕弦、四糸乃、七罪。皆、士道に霊力を封印された精霊たちである。彼女達は五河家にしばしば夕食を食べにくる。十香に限っては毎日くるのだが。

作った料理を皿に盛り付け、精霊たちがテーブルへ持っていく。

琴里は自分も手伝おうと、チュッパチャプスを舐め終えて残った棒を口から出しゴミ箱へ捨てる。そして士道から料理が盛られた皿を渡されると、

「ま、この話は十香たちが帰った後にしましよ。食事中に仕事の話じゃつまらないからね」

と士道に言っつてリビングへと向かっていった。

「そうだ、な。食事中くらいは楽しもうか」

独り言を呟いた士道もリビングへむかう。リビングからは士道を催促する声がキッチンに響く。

「シドー！みんなまってるぞー！」

「悪い悪い」

十香の声で急かされた脚は歩幅が大きくなり、すぐに椅子へとたどり着く。椅子に腰を下ろし、手を合わせて言った。

「ごめん、ごめん。みんな待たせな。それじゃあ——」

『いただきます！』

## 妖と凶

日はとうに暮れ、冬の凍てつく寒さを孕んだ乾いた風が《天宮ひまわり園》に戦ぐ。電灯がチカチカと点滅する様子を緑髪紅眼の女性がつまらなそうに見つめている。電灯が点滅を止めて弱々しく光り出すと女性はティーカップへと手を伸ばした。

こんな時間にひまわり園などという季節外れの施設に居る彼女はやはり季節外れの薄手の出で立ちで日傘を持っている。椅子に座ってティーカップを口に持っていく姿は一種の芸術作品と言っても過言ではないだろう。

そんな世にも奇妙な女性——風見幽香はティーセットを小さな円卓の上に置くと肘を立たせ掌に顎を乗せて思考に耽っていた。

どうすれば私の庭太陽の畑に帰れるのだろうか。どうやってスキマ妖怪の奴をぶん殴ってやろうか。あの男は又ここにくるのだろうか。ああ、誰か私と戦ってくれないか。

一つ浮かんでは消え、また一つ浮かんでは消え。シャボン玉のような取り留めのない思考が彼女を弄んでいるようである。

次々に浮いたシャボン玉はすべて弾け、幽香は呆れたように大きな溜息を洩らし、彼女を取り囲む暗黒の一点を睨みつける。

「誰だか知らないけど、私に用かしら？ さっきからずっとそこに居るあなた」

と、幽香は電灯の奥の暗闇に向かって言った。

「あら、あら」

驚きの感情が混ざってはいるが、蠱惑的な声が暗闇の中から響く。すると、幽香が視線を向けていた闇の中から電灯の光の下に1人の少女が現れた。

左右非対称な長さのツインテールとヘッドドレス、黒と赤コルセットに幻想的なドレスを纏った少女。その右眼は幽香に似た紅あか、左眼は金色こんじきのオッドアイであった。よく見ると左眼は時計そのもの。

そんな二人目の世にも奇妙な少女——時崎狂三は心底驚いた様子



で幽香に語り掛ける。

「初めてですわね。影の中にいるにわたくしに気づいたお人は。いつから気が付かれていますか?」

「…あなたが私を見始めた時からよ」

それを聞き狂三はまた驚かされる。これは思っていた以上に大物だ、と。

「きひひひひ、それはそれは。失礼しましたわ、ワタクシ時崎狂三と申しますの。以後お見知りおきを」

狂三はスカートの裾を掴んで頭を下げる。その所作は何処ぞの王国の姫君を思わせる。

「ふーん。私は風見幽香よ」

それに対して幽香は顎を掌に乗せたまま手短かに答える。こちらの態度は魔王の妃と言ったところか。

「私の名前なんてどうでもいいのよ。あなたが質問を質問で返したせいで最初の質問が有耶無耶になったじゃない」

「あら、あら。それは悪いことをしましたわ」

狂三は悪びれもなくクスクスと笑うだけで謝ろうという気はさらさらでないようだ。

「で、あなたはは此処になんの用があつて来たのかしら?もしかして私を退治しようとしてきた、とか?」

幽香の紅い<sup>あか</sup>眼光が鋭く光る。それは狂三を見定めてるようであり、闘いを期待しているようでもある。

「きひひひひ、そんな事ありませんわあ。そんなに睨まないで下さいまし。ただ、強い力を感じたから偵察に來ただけですの」

「あつそ。それならもう用は無いわね、立ち去りなさい。…ああ、それとその笑い方は気色悪いわよ?」

「なッ!」

その言葉は狂三の心を深く抉ると同時に怒りの着火剤にもなった。「……………きひひひ、ひひひひひひッ、そうですかア!その宣戦布告、受けてたつて上げますわあ」

「あら、私と遊んでくれるの?なら、本気でかかって來なさいな」

幽香はおもむろに椅子から立ち上がり、指先をちよいちよいと。その様子に、狂三の怒りは頂点に達した。そしてステップを踏むようにして両足を開き、

「その舐め腐った態度を矯正してさせ上げますわア！おいでなさい——  
ザアアアアフキエエエ  
——刻々 帝——」

狂三は自分の保有する最凶の天使を呼び出した。狂三背後の影から巨大なものが現れる。狂三の身長の数倍ほどの大きさの金の文字盤に、本来針がある場所にはアンティークな歩兵銃と短銃がハマっている時計。その時計塔についていそうな時計は見ている2人には圧巻だった。

「なかなか圧巻ね。でも、もう終わっちゃったわ。つまらない」  
隣にいる幽香が驚いていたので少し得意になる。最後に言ったことの意味は分からなかったが。

しかし、ふと狂三にの頭の中に一つの疑問が生じる。何故この女は私の髪を掴んでいるのだろう、と。それを境に疑問が溢れ出てくる。何故いつもより視線が低いのだろう、なぜ自分の体と背後の刻々帝が見えるのだろう、なぜ金色の文字盤に映る私のシルエットには頭が付いていないのだろう。

「……………?!」

言葉の意味を理解できた狂三は即座に行動した。「八の弾」により生み出された自分を使い、「四の弾」を頭のない自分に撃ち込ませたのだ。すると、視界が暗くなりつつも狂三の意識の視線が高くなり自分の身体へと向かい、あるべき所へと戻った。

体に血が流れているのを実感しながら自分の手で首がちやんと繋がっていることを確認する。

「カハッ……はあっ……はあっ……危ないところでしたわっ」

数秒遅ければ死んでいたであろう。狂三はフルマラソンを完走したランナーのような荒い呼吸を繰り返す。そんな息も絶え絶えな狂三をよそに、前方からパチパチと乾いた音が響く。

「凄いわね。首と体が離れたのに生きてるなんて、面白い手品ね」

「手品ですって……?!」

自分を殺そうとしていた癖によく言う、と毒づきたい気持ちを必死に押さえつける。

「あなたはっ……！どうやって、わたくしの頭をツ……！！」

恐怖で声がうまく出せない狂三を狂三が笑う。

「あら、あら。『わたくし』は少し怖がり過ぎではないのですの？」

「黙りなさいッ！」

狂三は憔悴しきった顔で狂三へと吠える。

「酷いですわ、酷いですわ。助けてさしあげたのに『わたくし』に怒られましたわ。もう助けて差し上げませんわ」

と言って狂三は影の中に消えていった。

「終わった？」

2人の茶番劇の間に幽香は椅子へと座っていた。円卓の上のティーカップからは湯気が昇っている、紅茶を新しく注いだのである。ティーカップを手に取り、紅茶で喉を潤した幽香は興味をなくしたように素っ気なく言った。

「あなたがなんか叫んだ後に高速で近づいて、掴み取って、高速で元の位置に戻っただけよ。痛みを感じなかったのは私の技術かしらね」

それを聞き、狂三は戦慄した。精霊である自分が気づかないほどの速度でその三つのことをやってのけたコイツと自分とは地の能力が違い過ぎる、と。わたくしは何て相手に喧嘩を売ってしまったのでしょうか、と。大物なんてものじゃない関わってはいけないものだった、と。

狂三はその場にへたり込み、力無く問う。

「あなたは……何なんですの？」

「ただのお花の好きな妖怪よ」

「よう……かい、」

妖怪が本当にいるとは思った狂三だったが、「わたくしが言えたことではありませんね」と自嘲した。

暫く静寂がその場を支配していると「あ」と幽香は狂三に視線を送る。

「いい暇潰しになったわ。ありがとう、狂三ちゃん」

「…ッ！」

魅惑的で、人を惑わす幽香の声にいきなり名前を呼ばれた狂三は同性なのにも関わらず顔を紅潮させてしまった。この声も幽香が妖怪たる所以なのだろう。

少しすると狂三は立ち上がり、幽香に向けて言った。

「夜遅くに失礼しましたわ。また会う時まで私のことを忘れないで下さいまし、幽香さん。では、ごきげんよう」

頬を赤らめながらお辞儀をすると狂三は影の中に姿を消した。

「また会う時、ね」

幽香はティーカップに唇を付けると、紅茶はもう冷えていた。新しく紅茶を注ぐとすぐに湯気が立つ。幽香はまた思考に耽る。それは出ては消え、出ては消える湯気のような――

## 不穏な動き

DEM（デウス・エクス・マキナ）インダストリーの臨時社屋の執務室。一人の男がそこそこ値の張りそうな椅子に座り、手に持った書類に目を向けていた。

洗練された刃のように鋭い瞼に挟まれた深淵の闇のような色の双眸、灰色がかつた金髪が特徴的な白人。彼はサー・アイザック・ウエストコット。30代半ばの見た目からは想像出来ない手腕の持ち主で、DRMインダストリーが世界に名を轟かせたのは彼の力と言っていないだろう。

ウエストコットは嘲笑していた。自分が手の上で転がされていることに気付かず、のうのうと私生活を送っているであろう『資材A』の顔が絶望に染まるのを想像するだけで、腹を抱えて嗤わらってしまいたくなる。しかし、声を出して笑うわけにもいかず、口角を上げる程度に抑えられていたが。

不意に、執務室のドアがノックされた。

「入りましたえ」

「アイク、失礼します」

ドアを開けて入ってきたのは長く明るい金髪をまとめ上げた少女だった。

彼女はエレン・Mミラ・メイザース。DEMインダストリーの第二執行部の部長兼ウエストコットの秘書をしている。それと同時に、世界最強の魔術師ウィザードでもある。仕事熱心な彼女が自分に呼ばれていないのに訪ねてくるのは珍しい、とウエストコットは書類を机に置きエレンの方へ向いて尋ねた。

「エレン？どうしたんだい、今日の予定はもう入って無かったはずだが」

「新しい霊派反応が確認されました」

「ほう」

「新型の精霊は空間震を起こさず、静粛現界したようです」

「それは珍しい。だが、君が言いに来るほどのことでもない。……何があつた?」

精霊が現れた程度ならばわざわざエレンが言いに来る必要などない。部下に任せるだろう。しかし、エレンが来たからには何か重要なことを言いに来たのだ。

「流石アイクですね」

エレンは少し間を置いて言う。

「実はその精霊は霊力値がマイナス値を示した状態、つまり魔王のままで現界したようです」

「なんだと…?」

ウエストコットは驚きを隠しきれない顔で怪訝そうに呟く。そう、そんなことはありえないはずなのだ。

精神に多大なストレスがかかった時など精神に大きな変調があつた場合のみ精霊は魔王となる。例えば、十香が魔王になってしまった。それは士道が胸を貫かれた時、士道が自分のせいで死んでしまったという深い絶望感に十香の精神が耐えられずに変調をきたしてしまったからだつた。

精神の変調以外にも何らかの原因はあるかもしれないが、それが大前提。それが無いと反転することなどまず起きないだろう。現界前など以ての外だ。

「……誰かが手を加えたのだろう。まあ、そんな出鱈目なことをやってのけるのは『奴』ぐらいだが」

「それならば私が魔王のところへ出向きます…!」

エレンはウエストコットから発せられた『奴』という言葉に過敏に反応した。感情が無いロボットのような口調から一転、喧嘩してムキになった子供のような声を上げた。

「駄目だ」

「何故ですか!? 私が行けば楽勝…でなくとも魔王を倒せるはずですよそれに…」

「エレン」

「……ッ!」

自分の提案が却下され、感情が昂ってしまったエレンはウエストコットに名前を呼ばれたことよって諫められた。ウエストコットの見た目には似つかわしくない老獪な雰囲気を持つ一言によりエレンの思考回路は急速に冷やされていった。

「失礼しました、アイク」

「いや、謝ることはないよ。エレンが熱くなるのは仕方ないことだと思う。だが、君が今魔王を仕留めてしまうと『奴』が動き出してしまいかもしれない。それにヘラタトスクも黙ってはいないだろう。そうなるならエレン、いくら君でも分が悪い。」

「……そうですね、浅はかな考えでした」

「分かってくれたのならいい。今回は偵察機を送って様子見しようか。……ところで、『資材A』はどうなった？」

「『資材A』ですか」

先ほどの張り詰めた雰囲気を感じさせないウエストコットに『資材A』のことを聞かれたエレンは手に持った資料をめくる。

「今日、五河士道と接触したようです。彼女の住居と思われるマンションに五河士道連れこんだ、と報告されています」

「ふむ、驚くほど予定通りという事か。あれだけ強力な天使を持っていながら……宝の持ち腐れというやつだな。ああ、楽しみだ、あの力が私のものとなると思うと」

「私も待ち遠しいです。アイクだからこそ、あの力を使いこなすことができる」

「そう言ってくれると嬉しいよ。事情はわかった、もう戻っていい」  
「では失礼します」

エレンは執務室を後にした。

ウエストコットもエレンを追うようにして執務室から退出する。邪悪な笑みを顔に浮かべながら。

「人生予定通りなんてないのよ、人間。ふふふ…」

誰もいないはずの執務室に声が響くが、その声は誰の耳にも入らなかった。



## 再びひまわり園へ

翌日、土道は幽香のところへと行くことになった。二亜の事もあるがこちらの方が優先順位が高いという結論に至った。前例がある精霊の二亜とは違い、今回初観測された妖怪の幽香であればどちらが優先されるかは火を見るより明らかだろう。二亜の方を放置してもいいという訳では無いが。

それはさておき、土道は今《天宮ひまわり園》の前で立っていた。右手には人気ケーキ屋のロゴが入った箱を下げ、そわそわと落ち着きのない様子を見せている。

『あ、あー、聞こえる？土道』

「おう、聞こえるぞ」

右耳のインカムからプツツという聞き慣れたスイッチおんの後に、琴里の声がクリアアーな音声で聞こえてくる。

『土道は身をもって分かっているとと思うけど、相手はこれまでの精霊とは全く異質な存在よ。気を引き締めて行きなさい。私たちは今まで通りサポートに徹するわ、良いわね？』

「もちろんだ。……サポートよろしくな、琴里」

『ええ。完璧にこなしてみせるわ。……つと、ちよつと待ってなさい』  
パチンツ

指を鳴らす音がインカムから聞こえた後、神無月の叫びが聞こえてくる。

『ああつ！司令、放置プレイですね！私はいつまでもお待ちしており』  
神無月の琴里<sup>ト</sup>への忠誠<sup>ノ</sup>の言葉<sup>ハ</sup>はドアによって遮られ、最後まで聞くことは叶わなかった。

「……おい琴里、今神無月さんの叫び声が聞こえけど」

『何も無かった』

「いや、今」

『何も無かった、いい？』

「はい…」

神無月さんご達者で…。いや、あの人にとっては御褒美なのか？

……考えないでおこう。

『気を切り替えて、行くわよ』

「おう」

気持ちを整理して、俺は歩き出した。

鼓動が速さを増す。

ケーキを崩さないように意識して歩く。

汗が出る。

喉が乾く。

昨日を思い出す。

何もかもを意識して前に進む。

そして、それは見えた。

『なっ……』

インカムの向こう側にいる全ての人間の息を呑む声が聞こえた。  
二度目だが、やはり見惚れてしまう。

一輪の向日葵に水をやる彼女。

その顔をまるで子供を見る母親のような笑み。昨日は一度も見せなかった顔。植物に嫉妬するなんてどうかしていると思うが敢えて言おう。

——あの向日葵が羨ましい。

それほどに彼女は美しい。

紅い目、翠の髪、桃の日傘、チェックの服。完璧と言っているほど  
の美貌を持つ彼女<sup>ようかい</sup>。

そう、彼女こそが——風見幽香。

その繊細で長い睫毛<sup>まつげ</sup>がこちらを向く。

すると、聖母のような笑みは何処へ行ったのか、俺を見下すように  
言った。

「あら、お早いことね。そんなに早く私と会いたかったのかしら？  
……気持ち悪いわね」

ぐはッ!?

こうして俺と幽香は二度目の邂逅を果たしたのだった。

## 茶話①

幽香の口から放たれた「気持ち悪い」は俺の精神にクリティカルヒット、膝を屈させかけたが俺はなんとか持ちこたえた。忙しくてこの日しか空いていなかったと幽香に弁解するが「あら、土道くんは私に会うこと以外に用事があったのね。意外だわ」と返されてしまった。インカムから声を殺して琴里に笑っているのが聞こえる。

うるせいやい、こつちもやることはいっぱいあるんだ。部屋を掃除したりとか、ご飯作ったりとか、……その他は?……あれれ?

幽香にこれ以上何か言っても話が進まないと感じたので本題に入ることにした（現実逃避なんてしてない、決してしていない!）。

「そんなこと思われてたなんて心外だなあ。今日は幽香さんと話し合いに来たんだ」

「そう。じゃあ悪ふざけはやめにしましょうか。立ち話はあれだし、これに座りなさい。茶請けは持って来た?」

幽香はおちやらけた雰囲気をしまい込むとどこからか椅子と円卓を取り出し、赤いテーブルクロスをかけ、ティーセットも取り出してカップに紅茶（ハーブティーだろう）を注ぐ。どこぞの推理小説の執事顔負けの手際でティータイムのセットをこなした。その手際の良さに感心していると

、『どこからどうやってそんなものを出しているのよ!?!』と琴里が五月蠅いので、考えても無駄そうゆうものなんだと言い聞かせた。

そして俺は朝早くから店に並んで買ってきた10代から30代の女性に大人気のケーキが入っている箱を前に突き出した。

「ああ、ケーキを持ってきたぞ」

「へえ…『けいき』ねえ」

「むっ…なにか不満でも?」

「いいえ、その『けいき』を食べるのが初めてなだけよ」

なん…だど…?それは大事件だ。ボディービルダー並の筋肉を持つている人にプロテインを知らないと言われたのと同じくらいの衝撃だった。別に言われたことがある訳では無いが。

「そんなことはどうでもいいわ、話を始めましょうか」

「あ、ああ。そうしよう」

平静を装って話を進めようとしているが、早くケーキを食べたいのが明らかに分かるほど幽香はソワソワしている。その姿は「早く夕餉にするぞ!」とキラキラした瞳でこちらを見つめる十香にどこか似ていたので、思わず微笑んでしまった。



「ふうん…なかなかいけるわね、コレ。『生くりいむ』の味は特徴的でこれでもかかってぐらい塗ってあるけど、苺の酸味が上手く調和していて胸焼けしない。『生くりいむ』に生地がよく合っていて、紅茶にも合うわね」

グルメレポーター顔負けな食レポを無意識に披露している幽香は「これ後ろに塗り過ぎじゃない?」とケーキに夢中のように。と、その隙についてインカムから琴里の声が届いた。

『土道、悪いニュースよ』

『どうしたんだ?』

小声で聞き返すと琴里は溜息をついて話し始めた。

『土道が攻略対象“ユウカ”に話しかけてから、各種パラメータが微動だにしないのよ』

『なっ…!? て、てことは…』

『そう、あなたが思っている通りよ。あなたは何も思われていない、全く興味を示されていないのよ』

## 茶話②

衝撃だった。

自分がなんとも思われていないという事実は、士道の自信を打ち砕くのに一秒もかからなかった。

『ごめんなさい。私達は最低限のバックアップしか出来ないみたいだわ…』

「あ、ああ…」

士道はこれまで何人もの精霊の力を封印してきたが、それは戦艦〈フラクナシス〉のクルーたちの助力が無ければ成しえなかった事だ。クルーたちが3つの選択肢から最適解(?)を選び出し士道に伝え、士道が精霊に伝えられたものを言う。このルーティンワークによって士道は「精霊の力を封印する」という綱渡りを成功させてきたわけだ。しかし今、「3つの選択肢」という命綱を付けることを禁じられてしまった。つまり、幽香<sup>怪物</sup>を自分の力だけで攻略しなければならぬという事である。

インカムからは琴里が弱音を吐いているのが聞こえるが、それ程うほどの心の余裕は今の士道には無かった。

嫌な汗が流れ、喉が異常に渇く。どうにか喉を潤そうとハーブティーを一気に呷る。前回飲んだものとは違い、とても飲みやすいものになっていた。

「で、士道くんは昨日の今日で何をしに来たのかしら？」

幽香は既にケーキを食べ終えていたらしく、自分で入れたハーブティーを楽しんでいた。

「えっ、あ、その」

「……」

慌てて取り繕おうとするが、動揺し過ぎてうまく言葉が出てこず、ついでに変な身振り手振りが出てしまう。そんな自分の滑稽な姿を幽香に無言でジツと見つめられ、顔が熱くなる。ふう、と深呼吸をして少し冷静さを取り戻した。

「すまん、幽香さんが淹れてくれたお茶が美味しくてぼっーとして

た。で、今日来た理由は幽香さんを元の場所に戻すためには情報が必要だろ？だから幽香さんが元居た場所の事を聞きに来たんだ。勿論、俺たちの住んでるここの話もする」

「分かったわ。なら私から話させてもらおうわね」

幽香は自分と俺のカップに茶を満たすと一口飲み、語り出した。

「そう、ね。私が住んでいる場所は『幻想郷』って言うのよ。人々に忘れ去られたモノが辿り着く場所よ」



互いの話が一息つく。

幽香の話は「へえ、そうなのか」と簡単には信じられないものだったが、それを信じなかったら目の前のヒトの説明がつかない。

幽香の話はこうだ。

人に忘れ去られたモノが辿り着く場所、幻想郷。そこには妖怪や神、幽霊、妖精、仙人、魔法使いなど非科学的な者達が住まわっていて人里もあり、少なからず人間も住んでいるらしい。妖怪は基本的に人間に関わらないのだが、中には友好的なものもいて、新聞をばら撒く天狗、寺子屋（昔の小学校のようなもの）で教鞭をとる半妖など妖怪と言っても様々なのだという。ちなみに幽香は人里から離れたひまわり畑に居を構えていて、たまに人里の花屋を覗きに行くらしい。

インカムからは『そんなところあるのか？』『都市伝説とかでも聞いたことありませんね』『漫画とかでよくある隠れ里的なものでござるか？』『ちくわ大明神』とそれぞれの見解が聞こえてくる。誰だ今の。

土道が頭の中を整理していると、幽香は「水をあげるわ」と土道に言い残し席を立つ。

その瞬間だった。

目の前の幽香の姿が欠き消えたかと思うと、爆弾が爆発したかのような轟音と凄まじい衝撃波が土道を襲った。土道は椅子ごと倒れ後頭部を強打、更になんと運の悪いことかポットのの中身が股間部分へと直撃した。

「あつづつっつううういー！」

『一体何が起きたの!?!土……何が……き……せつ……し……!……』

！』

インカムから琴里の必死な声が聞こえるが徐々にノイズに飲まれて聞こえなくなってしまうた。

土道は急いでジーパンを脱ぎ、なんとか大事な部分の火傷を回避すると、轟音の発生地点の方へと振り返る。

そこにはひまわりを守るように立つ幽香と、まるで天使のように天からゆっくり降りてくる金髪金眼のロリ巨乳が睨み合っていた。

「ふむん？よく耐えおったな。一撃で決めるつもりだったのじゃが」

「何をしに来たとか、何がしたいかなんて知らないけど、あんたが死にたいってことははっきり分かったわ」

一触即発の雰囲気の中、土道は冬の寒さに膝を揺らしていた。

## 鍵

深い眠りの中に居た。

何も考えなくていい。

心を閉じたままでもいい。

傷つき壊れそうな心を必死に繋ぎ止めなくていい。

優しい姉と優しい両親、家族と見ればそればいい。

本当はこんなことしても意味がないのはわかっている。

でも、もうこれ以上傷つきたくない。

決して戻る<sup>速</sup>ことのない日常<sup>夢</sup>の中で微睡んでいたい。

できるならばこの命が終わるまで——

コンコン

だが、そんな夢はいとも容易く壊されてしまった。

『はあい、お休み中に失礼するわよー？あなたが六喰ちゃ——』

「封解主、<sup>ミカエル セグザア</sup>閉」

誰も踏み込めるはずのないこの空間に響く暢気な声。その腹立たしい声を遮るように外部からの情報を閉じる。どうやってここを嗅ぎ付けたかは分からないが、これでまた誰にも干渉されずに……

『——あーあー、お、通ったわね。もう酷いではなくて？話も聞かずに切るなんて。私とのつながりを断ったみたいだけど残念、私からは逃げられないわよ』

「…むん？どうやら面倒くさい客のようじゃの、封解主<sup>ミカエル セグザア</sup>の閉が効かないとは」

『そんな眉間に皺を寄せないの。かわいい顔が台無しよ？』

重たい瞼を上げ、声がする方を睨みつける。いつぶりに目開けただろうか。ぼやけている視界が徐々に鮮明になっていくと声の出元が見えてくる。

「…：…なんじゃ、その気味が悪い姿は。変な動きをしてみよ、むくは全力を以ってうぬを叩きのめそう」

空間を縦に引き裂いて広げ、縁をリボンで結ばれている穴から無数の眼がこちらを覗いていた。ソレから素早く距離をとり臨戦態勢に



入った。ソレに出現させた封解主の先を向け、いつでも『封解主  
シフルール』を使えるように体中に魔力を循環させてから警告する。

『あら、そんな真つ直ぐ敵意を向けられたら少し遊んであげたく  
なつちやうじゃない。でも、今日は止めときましよう、五月蠅い狐に  
怒られちやうからね。だから警戒しないで?』

「…そんなに胡散臭い言葉をむくが信じると思うか?」

『仕方ないわね』

そう言う謎の声の気配が遠ざかっていく。暫くするとソレから  
白旗? (端にケモノ耳がついたナイトキャップがくりつけられてい  
るもの) を持った腕が現れ、ひらひらと振りだした。降参のつもりな  
のだろうか。その腕に対して閉を掛けようとするが、ソレの中に腕を  
引っ込めて避けらる。

『もう、酷いじゃない。いきなり攻撃してくるなんて。こちらには  
戦う意志はないって言ってるじゃないの』

「変な動きをしたぬしが悪かろう。言ったじゃろ? 全力を以って叩  
きのめすと」

『私はただ六喰ちゃんとお話をしたいだけよ』

「それならまずうぬの姿を見せるのが先じゃろう。話をするとき  
目を見て話せと親に教わらなかつたかの?」

親と言葉を発した途端ソレが閉じ、気配も消える。あたりを見回す  
がソレらしきものは見当たらない。

「…貴女が親とは笑わせるわね、星宮六喰」

「ぬっ…!?!」

周りを警戒していたにも関わらずずっとそこに居たかのようによ  
うに隣から女が話しかけてきた。

「ふんッ!」

鍵を横薙ぎに払うが手応えはなく、女はソレが元あつた位置に居  
た。

大きなリボンを巻いたナイトキャップから流れる金髪は赤いリボ  
ンで何本にも結われている。妖艶な雰囲気醸し出す紫のドレスは  
大きく開いた胸元から豊満な胸を強調させている。シワ一つない真

白なドレスグローブには日傘が握られ、肩を支点にしてクルクルと回している。そして顔にはお祭りの屋台で売られている安っぽい狐の面がつけられていた。

「やつと顔を見せる気になったかと思えば狐の面とは」

「仕方ないのよまだ顔を見せるわけにはイケナイの。そんなに感情を昂ぶらせて大丈夫かしら？」

その言葉を聞き、先程から感じていた違和感の正体が解った。いや、気づかされた。

閉じていたはずの感情が出てしまっているのだ。

「うぬはむくに何をしたのじゃ？宇宙空間で喋れていることもおかしい！それに何故名前も家族のことも知っている！」

「質問が多いわねえ。一つ目、私の力を使った。二つ目、特別な結界を張らしてもらった。そして最後、交渉には相手にメリツトを提示させなきゃいけないわ。相手が何を欲しているか知る必要がある。それには情報が必要、だからあなたのことを調べたの。隅から隅までね。これでいいかしら？」

女は面倒くさそうに言う、手に持っていた日傘を閉じて手元に開いたソレにつっこむと代わりに扇子を取り出しパタパタと煽ぎだした。

この相手は本気で叩かないとマズい。本能がそう叫んでいる。『ミカエル シフルール封解主』【放】を開放しようとするが、無数に現れたソレから伸びた腕に手足体を掴まれ拘束されてしまった。振りほどこうとするが、精霊である自分よりも圧倒的に強い膂力で押さえつけられて全く体が動かない。

「くっ、離すのじゃ！むくに乱暴する気じゃろう、エロ同人みたいに！エロ同人みたいに！」

「違うわよ！どこで覚えたのよそんな言葉！今まで貯めてた感情が爆発してるんじゃないかしら！ま、まあいいわ。話を本題に戻します」

「ふむん……。いいじゃろう」

「いや、いきなり真顔に戻らないでくれる!?めっちゃ怖いわよ！情

緒不安定なの!？」

めっちゃツツコミをいれてきたが、手足の拘束は全く緩まなかった。女の気を逸らして拘束を緩くする作戦も失敗に終わり、抜け出すことを諦めて女の話に耳を傾けることにした。

「おほん……あなたにはこの女と戦って貰うわ」

渡された写真には向日葵畑の中に立つ緑髪赤眼の女が写されている。

「ふむん……?戦うだけでいいのかの?」

「構わないわ。それに、負けても報酬は払うわ。まあ、できるのなら殺してしまってもいいわ。できるなら、ね」

「むくもなめられたものじゃな。して?報酬は何を貰えるのじゃ?」

「ふふふ……せつがちね。じゃあ少しだけ味見させてあげるわ」

そう言うと女は扇子を閉じ、指を鳴らした。

パチン

とても心地よい夢、お父さんとお母さんとお姉ちゃんでピクニックに行く夢。川沿いの桜並木を歩き、近くの自然公園でお弁当を食べた。私が作ったおにぎりは形が歪で美味しそうには見えなかったけれど、みんなは美味しいと言ってくれた。帰りはみんなで手を繋いで帰る。何も変哲のない日常の夢だった。

「……!!なっ、何じゃ今のは」

「あら、おはよう。いい夢は見れたかしら?」

女はソレに座りながらお茶を飲んでいて。狐の面の上からどう飲んでいるのか分からないが啜っている。

「…夢が報酬なのじゃな?」

「察しがいいわね。そうよ、あなたがその女と戦ってくれれば夢を見せてあげる、それが報酬よ。倒してくれたのならずっと見させてあげてもいいわよ」

自分が求めていたものが目の前にある。この写真の女を殺せば、ずっと。

「……ふむん。うぬの名はなんと言うんじや?」

「うーんと、そうねえ…。簡単にへヴアイオレット〜とでも名乗っておきましょうか」

「ぶあいおれつと、じゃな。分かった。うぬの提案、受けようではないか」

「そう、やってくれるのね！報酬は必ず払うわ。頑張つて倒すのよ、六喰」

と、頭をなでてきた。まるで我が子を撫でるかのように優しく手触られる。やがて手が離れると「あつ…」と声を漏らしてしまう。

「それじゃあ、私はこれでお暇させていただくわ」

そう言つてヴアイオレットはソレの中へ消えていった。手足の拘束も消え、自由になった。

先程撫でられた場所に手を置き口を開く。

「…これは、報酬を追加してもらうしかないようじゃ。——よし、封解主、ミカエル ラータイプ開」

封解主を呼び出し空間を開く。目標は写真の女。女には悪いが消えてもらう。これは夢のためなのだから。

そうして、開いた空間の狭間から転移した。